『ロキフェールの戦い』における妖精モルガーヌ

――「アーサー王物語」の「武勲詩」への影響――

La fée Morgane dans la *Bataille Loquifer* : à propos de l'influence du roman arthurien sur la chanson de geste

渡　邉　浩　司

要　　旨

「武勲詩」は，『ローランの歌』を皮切りとして11世紀後半に生まれ，12世紀中頃に初期の作品群が成立し，13世紀に３つの詩群が形づくられた。そして，こうした潤色過程で「アーサー王物語」の特徴的な要素を取りこみ，ジャンルの革新を行った。「ギヨーム・ドランジュ詩群」に属する『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」がその典型例であり，その中ではアーサー王の異父姉妹モルガーヌが中心的な役割を演じている。現世の勇者レヌアールを異界アヴァロンへと連れ去る妖精モルガーヌは，妖女であると同時に極端な母性愛を見せる両義的な存在である。

キーワード

武勲詩，アーサー王物語，『ロキフェールの戦い』，
アヴァロン，モルガーヌ，レヌアール

福井千春先生のご霊前に捧ぐ

1．はじめに

妖精モルガーヌは，13世紀中頃までに成立した中世フランス語散文による「聖杯物語群」[1] では，両義的な存在として描かれている[2]。なぜなら，

善行を施す良き妖精でありながら，自尊心を傷つけられると報復を行うからである。

「聖杯物語群」の掉尾を飾る『アーサー王の死』（*La Mort le roi Artu*，1230～1235年）によれば，アーサー王がモルドレとの一騎討ちで瀕死の重傷を負ったとき，モルガーヌは舟で王を迎えにやってくる。治療術に熟達し，怪我を治すため王をアヴァロンへ運ぶモルガーヌには，良き妖精の名残が認められる。

しかしながら，「聖杯物語群」ではむしろ，モルガーヌの残酷さと恋の嫉妬が印象的に描かれている。『ランスロ本伝』（*Lancelot*，1215～1225年）では，恋人ギュイヨマールから捨てられた後，意中の女性に不実だった騎士をことごとく「帰らずの谷」へ幽閉しているモルガーヌは，ランスロに恋をして魔法で捕らえるが，逃げられてしまう。『アーサー王の死』のモルガーヌは，幽閉中のランスロが室内の壁に描いた王妃グニエーヴルとの不倫の場面をアーサー王に見せて王妃の不倫を暴露し，結果的にアーサー王国の崩壊を引き起こしている。

このように，アーサー王世界の命運を握る妖精モルガーヌは，「武勲詩」と呼ばれるジャンルとも無縁ではない[3)]。「武勲詩」は，国や民族の存亡の危機を救った英雄の武勲を歌った叙事詩である。最古かつ最大の傑作『ローランの歌』（*Chanson de Roland*）[4)] は，異教徒のサラセン軍を前に，ローランの率いるキリスト教徒の後衛が全滅する経緯を描いている[5)]。主君や祖国に忠誠を誓い，目覚ましい武勲を果たした後，壮絶な戦死を遂げる英雄を描く作品が成功を収めると，それを核にして英雄の他の武勲，英雄の幼少年期から壮年期・老年期まで，さらには英雄の親族・一門の事績が歌われるようになった。このように詩群（サイクル）は形成されていったのである[6)]。

こうした潤色の過程で，「武勲詩」は「アーサー王物語」の作中人物を取りこんでいった。本稿では，「武勲詩」の３つの詩群[7)] の１つである「ギヨ

ーム・ドランジュ詩群」[8] に属する『ロキフェールの戦い』（*Bataille Loquifer*）のモルガーヌ像に注目したい。

2.「レヌアールの武勲」と『ロキフェールの戦い』

「ギヨーム・ドランジュ詩群」は，オランジュのギヨーム（Guillaume d'Orange）[9] を中心に，父ナルボンヌのエムリ（Aymeri）とギヨームの兄弟・従兄弟の武勲を歌ったものである。その中には，サラセン王デラメ（Desramé）の息子にあたるレヌアール（Rainouart）の武勲をテーマにした作品も含まれている。

レヌアールの活躍を歌った『アリスカン』（*Aliscans*，12世紀末）[10] によると，デラメ王の率いる異教徒の大軍を前にアリスカンで劣勢に立たされたギヨームは，ルイ王のもとを訪れ，援軍を嘆願して認められる。そして王宮で見つけた怪力の巨漢レヌアールをルイ王から譲り受け，戦場へ戻る。レヌアールは，ルイ王によって商人から買い取られ，７年もの間，王宮の調理場で働かされていた。ギヨームの片腕となったレヌアールは，モミの木で作った棍棒[11] を武器に，アリスカンで目覚ましい活躍をする。そして捕らわれていたギヨームの甥たちを解放し，サラセン軍との戦いで勝利をもたらす。合戦の後，レヌアールがギヨームの妻ギブール（Guibourc）の弟，つまりデラメ王の息子であることが明らかになる。そこでギヨームはレヌアールに洗礼と騎士叙任を受けさせると，ルイ王の娘アエリス（Aélis）との婚姻を整えてから，ポルパイヤール（Porpaillart）[12] を封土として与える。

こうした筋書きの『アリスカン』に続くのが，12世紀末から13世紀初めに成立したと推測される『ロキフェールの戦い』[13] である。この作品には韻文版と散文版[14] があり，韻文版を伝えるのは次の10写本である[15]。

A[2]　パリ・フランス国立図書館フランス語1449番（13世紀中頃）

A[3]　同図書館フランス語368番（14世紀前半）

A[4]　ミラノ・トリヴルツィアーナ図書館1025番（13世紀最後の３分の１）

B[1]　ロンドン・大英博物館 Royal 20 D XI（14世紀初め）

B[2]　パリ・フランス国立図書館フランス語24369–24370番（14世紀初め）

C　ブーローニュ公立図書館192番（1295年４月16日）

D　パリ・フランス国立図書館フランス語1448番（13世紀最後の３分の１）

E　ベルン市民古文書館296番（13世紀後半）

F　パリ・フランス国立図書館フランス語2494番（13世紀第２四半世紀）

ars　アルスナル図書館6562番（13世紀最初の３分の１）

フィンランドの文献学者J・ルーネベリが1913年に刊行した『ロキフェールの戦い』では，10写本のうちC写本とars写本が底本として使われている[16)]。これに対しモニカ・バーネットは，ルーネベリが「ウルガタ」と呼んだ残りの８写本のうち，D写本を底本にした校訂本を1975年に刊行した[17)]（バーネットの校訂本は10音節詩句の94詩節からなり，4222行を数える）。この作品が『ロキフェールの戦い』と呼ばれるのは，レヌアールが恐るべき巨人ロキフェール（Loquifer）との戦いを制するからである。レヌアールとロキフェールが武具として使う棍棒[18)]は，騎士の用いる剣とは対照的である[19)]。

サラセン人のデラメ王は，アリスカンでの合戦の途中に，船で自国へ逃げ帰った。『ロキフェールの戦い』の筋書きは，デラメ王の率いる艦船がレヌアールの治めるポルパイヤールの海岸に戻ってくるところから始まる。レヌアールは捕らえられ，船で連れ去られそうになるが，脱出する。その後，レヌアールと異教徒との戦闘中にレヌアールの若き妻アエリスが連れ去られそうになるが，レヌアールはこれを阻止する。そのため，デラメ王はロキフェルヌ（Loquiferne）の巨人ロキフェールに助けを求める。

息子マイユフェール（Maillefer）の出産後に妻アエリスが亡くなると，レ

ヌアールは絶望して呆然自失の状態になる。しかしデラメ王が率いる異教徒軍の攻撃が続いたため，レヌアールは呼び出される。そして棍棒を手にすると，同じく棍棒を武器にしたロキフェールを一騎討ちで倒す[20)]。デラメ王がギヨームとの一騎討ちで落命する間に，レヌアールの息子マイユフェールが連れ去られるが，ロキフェールに仕えていた小人ピコレ（Picolet）[21)]がマイユフェールを救い出す。

慣例では，レヌアール親子のその後を語る『レヌアールの出家』（*Moniage Rainouart*，12世紀末～13世紀初め）と『ロキフェールの戦い』は，併せて「レヌアールの武勲」（*Geste Rainouart*）と呼ばれている。『レヌアールの出家』のレヌアールは，ブリウード（Brioude）で修道士となったが修道生活に馴染めないでいた。その頃，コルドバで15歳になった息子マイユフェールは，ギヨームとの戦いに向かう異教徒軍を率いていた。レヌアールはギヨームからの要請を受けて修道院を出ると，相手の身許を知らぬまま息子と一騎討ちを行う。そして父子は感動的な再会を果たす。マイユフェールは洗礼を受け，ギヨームの姪イゾワール（Ysoire）と結婚する。レヌアールはその後，サラセン軍の巨人ガディフェール（Gadifer）との一騎討ちを制して修道院へ戻り，まもなく亡くなる[22)]。

3．『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」

ルーネベリが「ウルガタ」と呼んだ８写本のうちの５写本（A^3，A^4，B^1，B^2，D）には，ルーネベリの校訂本には見つからない独自のエピソードが含まれている。妖精モルガーヌが登場するこのエピソードは慣例で「アヴァロン・エピソード」と呼ばれているが，ジャンヌ・ワトゥレ＝ウィレムやロランス・アルフ＝ランクネールが指摘したように，かつては13世紀後半に写字生が行った補筆だと考えられていた[23)]。

しかしながら，マドレーヌ・ティッセンスが明らかにした通り，C写本

と ars 写本は残りの写本群よりも筆写年代が古いわけではない。そのため「アヴァロン・エピソード」の有無は，各写本での『ロキフェールの戦い』と他の作品との関連から説明が可能である[24]。その鍵となるのが，ギヨームとデラメ王の戦いの結末である。

「ウルガタ」写本群に登場するギヨームは，デラメ王の首を刎ねてポルパイヤールの町の門に突き刺す。すると恐ろしい嵐がやってきたため，レヌアールはデラメ王の首級を海へ投げこんで嵐を静めている。こうしてデラメ王との戦いが終わり，レヌアールはポルパイヤールの町に面した海辺で眠りこむ。そこへやってきた 3 人の妖精によって，レヌアールはアヴァロンへ運ばれていく。

これに対して C 写本には，『ロキフェールの戦い』と『レヌアールの出家』に続き，デラメ王が再登場する『フーコン・ド・カンディー』（*Foucon de Candie*，13世紀）が収録されている。そのため C 写本が収録する『ロキフェールの戦い』のデラメ王は，落命を免れている。この写本のデラメ王はギヨームとの戦いで深手を負うが，怪鳥アルシヨン（alecion）によって商船へ運ばれ，自国にたどり着く。そこで15年過ごして怪我を癒したデラメ王は，『フーコン・ド・カンディー』に再登場するのである。このように，C 写本では「アヴァロン・エピソード」が削除され，代わりにデラメ王が生き長らえるエピソードが語られたと考えられる[25]。

『ロキフェールの戦い』を伝える 5 写本の「アヴァロン・エピソード」で語られているのは，レヌアールのアヴァロン滞在である。レヌアールが海辺で眠っていると，妖精たちがやってきて，彼をアヴァロンへ連れていく[26]。アヴァロンには妖精モルガーヌ以外にも，アーサー王と円卓騎士団のメンバーなど，かつて現世で活躍した勇士が住んでいた。レヌアールはそこで，シャパリュ（Chapalu）という猫頭の怪物と一騎討ちをさせられる。

アヴァロン滞在中にレヌアールと一夜をともにした妖精モルガーヌは，

コルボン（Corbon）という息子を身ごもる。その後，マイユフェールの救出を望むレヌアールはアヴァロンを離れ，シャパリュとともに海路を進んだ。ところが，シャパリュはモルガーヌに命じられていた通り，海上で船を破壊してレヌアールを溺死させようとする。この間，マイユフェールは異教徒の王ティボー（Thibaut）から命を狙われるが，小人ピコレが阻止する。レヌアールは溺死寸前のところを人魚に助けられ，目を覚ます。するとアヴァロンへ連れ去られる前の岸辺に戻っていた。

4．『ロキフェールの戦い』のモルガーヌ像

ここでは，バーネットの校訂本『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」（第72節～第94節）で描かれた妖精モルガーヌ像を検討する。なおこの校訂本の底本に使われたD写本によると，物語の作者ジャンドゥー・ド・ブリー（‘Jendeus de Brie’, v. 3041）は，シチリア（‘Sezile’, v. 3045）でこの物語を披露し，多くのお金を稼いだという[27)]。

1）レヌアールの誘拐（第72節～第75節）

この作品の中でモルガーヌが最初に登場するのは，息子マイユフェールを誘拐されたレヌアールが悲しみに暮れ，棍棒の上に頭を乗せ，海辺の砂丘で眠っていたときのことである。そこへ「百合の花のように白い，３人の妖精」（‘.III. faes, blanches con flor de lis’, v. 3609）が「ヤマウズラのように飛びながら」（‘volant conme perdris’, v. 3610）やってくる。妖精は熟睡中の男がレヌアールだと気づき，アヴァロンへ連れていくことにし，こう述べる。

s’i soit o nos, s’il velt, tout son vivant,
avoc Artu et avoques Yvain,
avoc Gavain et avoques Rolant ;

la gent faee sont iloques manant. v. 3636-3639

彼が望むのなら，生きている間ずっと，そこで私たちと一緒に，アーサーとイヴァンと一緒に，ゴーヴァンとローランと一緒にとどまってもらいましょう。そこは不可思議な人の住む場所ですから。

妖精の１人がレヌアールを自分の恋人にしたいと言い出したため，同じことを考えていたもう１人の妖精は機嫌を損ねるが，争いに発展することはなく，３人でレヌアールを運んでいく。アーサーのもとへ遣わされた使者によると，妖精３人のうちの２人はモルガーヌ[28]とその姉妹マルジヨン（Marsion）という名だった。アーサーは，まもなくレヌアールがアヴァロンに連れてこられると聞いて喜ぶ。

この場面は，中世フランス語散文「聖杯物語群」の中核である『ランスロ本伝』のエピソードを思い起こさせる。すなわち，リンゴの木の下で眠っていたランスロが，ロエスタンの奥方，妖精モルガーヌ，シビルの３人によって，ゴール王国の入口にある「荷車の城」へ運ばれていくエピソードである[29]。「それは《湖の貴婦人》を除けば，この世で最も多くの魔法を知る３人の女性だった」（‘ce estoient les .III. femes del monde qui plus savoient d’enchantemens sans la Dame del Lac’）[30]と語り手は述べている。ランスロを連れ去る際，ロエスタンの奥方は彼の目を覚まそうとした。しかしモルガーヌの提案により，ランスロは魔法にかけられて眠ったまま城へ運ばれる。この３人の女性はランスロに，幽閉の身から脱したいのであれば，３人の中から最も気に入った女性を選ぶよう伝える。愛する王妃グニエーヴルに忠実なランスロはこの提案を拒否して幽閉が続くが，世話を任されていた乙女がランスロの逃亡に手を貸す。

13世紀後半の成立と推測される作者不詳の『フロリヤンとフロレット』（*Floriant et Florete*）の冒頭では，モルガーヌを含む３人の妖精が赤子フロリ

ヤンをモンジベルという名の異界へ連れ去っていく[31)]。このようにモルガーヌを含む３人の妖精によって誘拐される人物が幼い主人公であるケースは，「武勲詩」にも類例が見つかる。例えば「ギヨーム・ドランジュ詩群」に属する『レニエの幼少年期』（*Enfances Renier*，13世紀末）の冒頭では，マイユフェールの息子レニエが生まれたとき３人の妖精がやってきて，将来レニエが学識，武勇，美貌と富に恵まれるよう願っている[32)]。

こうした３人の妖精は，ギリシア神話でモイライ，ローマ神話でパルカエと呼ばれる３者１組の「運命の女神」の化身である。レヌアールをアヴァロンへ運んだモルガーヌを含む３人の妖精は，「運命の女神」と同じ属性を引き継いでいるように思われる。

２）異界アヴァロン（第76節～第77節）

海辺で眠るレヌアールの前に３人の妖精が現れたとき，物語の語り手は，

ans qu'il s'esvaille sera en tel leu mis
que n'est hons nés ne cheval ne ronsins
qui tant alast en .VI. mois aconplis.　v. 3624–3626
彼が目を覚ます前に連れて行かれる場所には，どんな人間も，どんな軍馬も，どんな荷馬も，６か月かけてもたどり着けないでしょう。

と述べている。妖精たちがレヌアールを瞬時に運ぶこの場所こそ，モルガーヌの住むアヴァロンである。ここは「島」ではなく「見事な町」（'cité vaillant', v. 3634）であり，第76節では次のように描かれている。

Avalon fut molt riche et asazee ;
onques si riche cité ne fut trovee ;

li mur an sont d'une grant piere lee
il n'est nus hons, tant ait la char navree,
s'a celle piere peüst estre adesee
que lors ne fust guarie et repassee ;
tout tens reluist con fornaisse anbrassee.
Chascune porte est d'ivoire planee ;
la maistre tor estoit si conpassee
qu'il n'i a piere ne soit a or soldees ;
.V. M. fenestres i cloent la menee.
Honques n'i ot de fust une denree ;
il n'i ot ais taillie ne dolee
qui d'ebenus ne soit faite et ovree ;
en chascune ait une piere soldee,
chiere ameraude et grant topace lee,
beril sardin et grant topace lee ;
la coverture est a or tregitee
sor .I. pomel est l'aigle d'or possee,
an son bec tient une piere provee ;
hons s'il l'avoit n'a soir n'a matinee
ja puis lou jor ne li iert riens vaee ;
cant qu'il demande li est lors aportee.
Leans converse la gent qui est faee ; v. 3678–3701

アヴァロンはとても富み栄えていて，これほど富んだ町は絶対に見つからなかった。町の壁は１つの巨大な石でできており，どんなにひどい怪我を負った人でも，その石に触れればたちまち治り，癒されるほどだった。そこは燃え盛る大かまどのように，ずっと輝いていた。ど

の扉も，磨かれた象牙でできていた。主塔は，どの石も黄金で補強されるように作られていた。5千の窓は中へ物音が入らぬようになっていた。普通の木材でできたものは何もなかった。すべての梁は彫刻が施されるか滑らかで，黒檀で仕上げられていた。それぞれの梁には，高価なエメラルド，巨大なトパーズ，緑柱石，紅玉髄，巨大なトパーズ[33]などの石が嵌めこまれていた。屋根は黄金で飾られ，天辺には黄金の鷲が置かれていて，その嘴は霊験あらたかな石をくわえていた。朝晩にその石を手にする者は，日中に何も拒まれることはなかった。何かを望めば，すぐに手に入った。そこには不可思議な人たちが住んでいる。

アヴァロンの描写でまず注目すべきは，町を取り巻く壁の石に触れると傷が癒されるという記述である。アーサー王伝承の中でモルガーヌに関する最初期の証言は，ジェフリー・オヴ・モンマス作『メルリヌス伝』（*Vita Merlini*，1150年頃）に認められる。そこにはアヴァロン島を支配する9人姉妹の長女モルガーヌ（ラテン語名モルゲン Morgen）が治療術に熟練し，薬草の効能に通じていたと記されている[34]。こうしたモルガーヌと医術の関連はクレティアン・ド・トロワの作品群[35]にも受け継がれている。例えば，『エレックとエニッド』（*Erec et Enide*，1170年頃）で冒険の途上で負傷したエレックを治し，『イヴァン』（*Yvain*，1177～1181年頃）で狂気に陥って森で野人同然の暮らしをしていたイヴァンに正気を取り戻させるのは，いずれも「モルガーヌの膏薬」[36]である。このように，モルガーヌの治療術が『ロキフェールの戦い』ではアヴァロンの町を取り巻く石に移されたと考えられる[37]。

次に注目すべきは，アヴァロンの町のすべての扉が「象牙」製で，梁が「黒檀」製という記述である。この「象牙」および「黒檀」と「異界」との密接なつながりを考える上で重要な比較項が，クレティアン・ド・トロワ

の遺作『グラアルの物語』（*Conte du Graal*，1181～1190年頃）である。『グラアルの物語』前半，漁夫王の館に招かれたペルスヴァルは「グラアル」の行列を目撃した後で夕食に与る。その場面で，小姓たちが「黒檀」製の２組の脚で支えられた「象牙」製のテーブルを運んでくる。また『グラアルの物語』後半でゴーヴァンが立ち寄る「不可思議の城」の入口の門は，１つが「象牙」製で，もう１つが「黒檀」製と記されている。いずれの城も「異界」に位置するため，「黒檀」と「象牙」は主人公の「異界」逗留を示唆していると言えるだろう[38]。したがってアヴァロンの描写に出てくる「象牙」と「黒檀」も，この町が「異界」に位置していることの証なのである。

３）怪物シャパリュとの戦い（第78節～第83節）

アヴァロンの町の塔の中で目を覚ましたレヌアールは，現世で見せた武勇を住人から試されることになる。そこでアーサー王は，猫頭で馬の体をした怪物シャパリュとレヌアールを対決させることにした。シャパリュは，妖精の一種リュタンのグランガレ（Gringalet，古フランス語ではグリガレ Grigalet）が湖で水浴中だった妖精ブリュヌオー（Brunehaut）を襲ってもうけた子供だった。生まれたときには美しかったが，激怒した母に魔法をかけられ，怪物の姿に変えられたのである。

シャパリュがもとの姿に戻るには，最も優れた戦士レヌアールの踵の血を飲む必要があった[39]。そのためシャパリュは果敢に戦い，途中でレヌアールの棍棒を取り上げて優位に立つ。この時点でモルガーヌが戦いをやめさせようとしたが，アーサーは戦いを続行させる[40]。シャパリュはレヌアールの踵に噛みつき，そこから流れ出た血を飲んで金髪の美男子の姿に戻る。するとシャパリュはレヌアールに感謝し，以後の奉仕を申し出たばかりか，レヌアールの息子マイユフェールの消息を伝える。異教徒のティボー王がマイユフェールを亡き者にしようとしたが，小人ピコレがこの企て

を阻止し，オディエルヌ（Odierne）で守り育てているという。

その後，広間ではレヌアールに敬意を表するための夕食の席がもうけられ，食事の後でアーサー王はレヌアールにアヴァロンの住人を紹介する。すべて現世で亡くなった人々であり，ローラン，ゴーヴァン，イヴァン，ペルスヴァルの名を順にあげ，自分の妃に触れた後，最後にモルガーヌを紹介する。

”（.....）et celle belle, a ce vis coloré,
ce est Morgain, qui tant a de bonté.” v. 3907–3908
「（.....）そして，あの血色のよい顔をしたあちらの美女が，たくさんの美点を備えたモルガーヌだ。」

とアーサー王が述べると，レヌアールは，

”Je volroie or, par sainte charité,
que je l'aüsse sanpres a mon costé！” v. 3910–3911
「私はこれから，聖なる愛徳にかけて，彼女をずっと私のそばに留めておきたいと思います。」

と答えている。

レヌアールの戦士としての力量を試すためにアーサー王が命じたシャパリュとの戦いを描くこの件には，アーサー王と妖精モルガーヌの他にも「アーサー王物語」に馴染みの固有名が複数登場している。アーサー王の甥で円卓騎士団の筆頭ゴーヴァンとその戦友イヴァン，ペルスヴァル以上に印象的なのは，通常ゴーヴァンの愛馬として知られるグランガレ[41]が，ここではシャパリュの父であるリュタン（‘.I. luiton’, v. 3803）とされている点で

ある。

シャパリュについては複雑な文学伝承が存在し，アーサー王と戦う「怪猫」として複数の文学作品で言及されている。しかしそのルーツは，中世期のウェールズでアングルシー島の災禍の１つとして知られていた「パリグの猫」（Cath Palug）と推測される[42]。これが中世フランス語で「カパリュ」（Capalu）や「シャパリュ」（Chapalu）という形態へと変化したと考えられる。

妖精モルガーヌについては，その美貌に力点が置かれている点が注目される。アーサー王が彼女の美貌と長所をほめそやし，レヌアールはたちまち彼女に魅了されている。

４）レヌアールの情事と船出（第84節～第88節）

アーサー王から紹介されたアヴァロンの名立たる住人の中で，レヌアールが最も関心を示したのがモルガーヌであり，その日の晩には情事に及んでいる。

> Morgue la nuit fut a lui a bandon ;
> toute la nuit fist Renoars son bon ;
> icelle nuit anjandra il Corbon,
> .I. vif diable ; ans ne fist se mal non. v. 3920–3923
> モルガーヌはその晩，彼に身を任せた。レヌアールは一晩中快楽にふけった。その晩，彼はコルボンをもうけた。それは本物の悪魔で，悪事しか働かなかった。

その後，レヌアールはアヴァロンに２週間留まる。モルガーヌから妊娠を告げられたレヌアールは，子供が大きくなったら自分のもとへ送り届け

るよう告げる。モルガーヌはレヌアールから，オディエルヌで小人ピコレに守られている息子マイユフェールに会いに行く決意を知らされ，その出発に反対はしないものの，レヌアール親子の再会を危惧した。それにより，彼女の産む息子（コルボン）がレヌアールの領土を継承する道が断たれることになると考えたからである。

そこでモルガーヌは妖精を母に持つシャパリュをレヌアールの船旅の同行者に指名し，海上で船を破壊してレヌアールを溺死させるよう命じる。シャパリュとともに船出したレヌアールは，泉のほとりで歌う[43] 数多くの人魚を見かけると，シャパリュに命じて人魚を１人連れてこさせる。嘆き悲しむその人魚を哀れに思ったレヌアールは，いつか恩返しをする約束をさせたうえで，海に帰してやる。

この一連のエピソードでまず注目すべきは，モルガーヌが一夜の情事で身ごもる息子コルボンを，語り手が「本物の悪魔」（‘vif deable’, v. 3923）と呼んでいる点である[44]。この悪魔的な子供にはモルガーヌ自身に備わる悪しき側面が投影されていると考えられることから[45]，『ロキフェールの戦い』の作者がモルガーヌの負の側面を熟知していたと推測される。ただし，ここで注意すべきなのは，勇士を虜にする妖女モルガーヌが母性的な存在でもある点である。なぜならモルガーヌはやがて生まれてくる息子の将来を見据えて，レヌアールの殺害を計画したからである。

５）モルガーヌの陰謀とその結末（第92節～第94節）

物語では第88節の終わりから，誘拐されたマイユフェールのその後について語られている。ギヨームに父デラメ王を殺害されたティボー[46] は，その復讐のためギヨームの親族にあたるレヌアールの息子マイユフェールを亡き者にしようと考えていた。しかし小人ピコレがマイユフェールを何とか助け出し，船でモンニューブル（Monnuble）[47] へ逃げる。そこはピコレ

の兄弟にあたる，今は亡きオーベロン（Aubéron）が治めていた町だった[48]。

物語は第92節から再び，航行中のレヌアールとシャパリュに戻る。船は夜明け前にはロキフェルヌに到着する予定だったが，シャパリュがモルガーヌから受けていた命令を実行に移す。シャパリュがボリエンヌ（Borienne）に向かっていた船を暗礁にぶつけると，船底に穴があき，マストと帆が壊れて，船内に水が入ってくる。すると妖精の血をひくシャパリュは海に飛びこんで，クジラや妖精よりも早く泳ぎ始める（‘plus noe tost que balaine ne faee.’, v. 4155）。このとき，シャパリュはモルガーヌの陰謀を明らかにする。

> A vois escrie : ” N’i a mestier celee.
> Renoars, freire, vostre vie est alee ;
> ce vos a fait faire Morgue la fee.
> Je m’en revois, ma poine ai achivee ;
> vostre proesce est del tot afinee.
> Tant me batis an la sale pavee,
> ja la dolor ne m’en iert trespassee ！” v. 4156–4162
>
> 彼は大声でこう言った。「隠し立てする必要はありません。レヌアール，友よ，あなたの命もこれまでです。妖精モルガーヌがあなたをこのような目に会わせるようにしたのです。私は戻っていきます。自分の務めを果たしたからです。あなたの武勇も，もはやこれまでです。石畳の広間であなたにひどく打ちかかられた，そのときの痛みが私から消えることはないでしょう！」

海上に浮かんでいた大きな船材をつかんだレヌアールは，それを使ってシャパリュに攻撃をしかけた。しかし，泳げないレヌアールは絶望し，死を待つのみとなった。レヌアールは板をつかんで持ちこたえていたが，大

波に襲われて海上に投げ出されたため，先に海へ帰してあげた人魚に助けを求める。また聖ジュリヤンにも加護を願い，この危機から救い出してくれるなら修道士になって悔悛を行うつもりだと述べる[49]。するとレヌアールが先に解放した人魚が100人以上の仲間を連れて姿を見せ，何人かで手分けをしてレヌアールを岸辺まで運ぶ。そして眠ったままのレヌアールを残し，再び海へ戻っていく。

海辺の砂丘で目を覚ましたレヌアールは，彼が治めるポルパイヤールの町とその周囲を目にして宮殿に向かい，町の人々や騎士たちに迎え入れられる。しかし亡くなった妻アエリスと，姿を消した息子マイユフェールのことを思い出して悲しみに暮れ，自分の服を破り，顔を引き裂いたところで，物語は終わっている。

『ロキフェールの戦い』の大団円では，人魚の恩返しが妖精モルガーヌの陰謀を阻止し，レヌアールは無事に領国への帰還を果たす。シャパリュはレヌアールとの対決のさなかに人間の姿を取り戻すことができたため，レヌアールに以後の奉仕を申し出ていたはずであるが，ここでは妖精モルガーヌの陰謀に躊躇なく加担している。モルガーヌはレヌアールをアヴァロンへ運んできたが，それはシャパリュに掛けられていた魔法の解除にとって不可欠なことであり，人間の姿に戻ることのできたシャパリュはモルガーヌに恩義を感じていたのであろう[50]。

レヌアールの溺死計画にあたってモルガーヌがシャパリュを選んだのは，その出自が有利に働いたからである。モルガーヌはシャパリュにこう述べていた。

“(.....)

si fai la nef pesoier et quasser ;

tu es faés, ne poras riens douter.

A ton voloir t'en poras eschaper." v. 3957–3959

「(.....) 船を破壊して粉々にしてやりなさい。お前は妖精の子なのだから，何も恐れる必要はありません。お前は望みどおりに難を逃れられるからです。」

妖精モルガーヌは，同じく妖精を母に持つシャパリュが海上でも巧みに泳げることを知っていたのである。

5．おわりに

『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」は，筋書きの上ではマイユフェールの探索になんら進展をもたらすわけではない。海辺で眠っていたレヌアールは，モルガーヌを含む3人の妖精によってアヴァロンへ運ばれ，そこでの短い滞在を経てもとの海辺に戻ってくる。そのためこの物語はあたかもレヌアールが見た「夢」であるかのように展開している。それにもかかわらず『ロキフェールの戦い』の作者があえてこのエピソードを用意したのは，12世紀末から13世紀にかけて大きな成功を収めていた「アーサー王物語」の特徴的な要素を持ちこむことで，「武勲詩」の革新を行うためだったと考えられる[51)]。

フランソワ・スュアールが指摘したように，『ロキフェールの戦い』は13世紀初めの時点で，「主人公の異界への旅」というモチーフを利用した最初の武勲詩であり，後の武勲詩はこのモチーフをうまく利用している[52)]。つまり『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」は，中世盛期における文学的嗜好の変遷を如実に表しているのである[53)]。さらには，異界アヴァロンにアーサー王と円卓の騎士たちに交じって「シャルルマーニュの甥ローラン」（'Rollant, lou nier Chalon', v. 3663）がいることは，「武勲詩」と「アーサー王物語」の相互浸透の可能性を見事に示しているように思わ

れる[54]。

『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」の登場人物に注目すると，主導的な役割を果たしているのは妖精モルガーヌである。モルガーヌは現世で最良の勇士レヌアールをアヴァロンへ連れ去り，その美貌で彼を虜にし，一夜の情事で息子を身ごもる。そこには，「アーサー王物語」で知られる「妖女」としての姿が残されている。その一方で，生まれてくる自分の息子コルボン[55]の将来を案じるあまり，レヌアールと幼いマイユフェールの再会を阻止しようと，レヌアールの溺死を目論んでもいる。そのためモルガーヌには，勇士の破滅を招こうとする悪しき意図と同時に，極端な母性愛も認められる。モルガーヌは恋の恨みからではなく，レヌアールの亡き妻アエリスの息子に対する嫉妬から，陰謀に及んでいる。こうした複雑な両義性こそが，『ロキフェールの戦い』における独創的なモルガーヌ像を作り上げているのである。

謝　辞

本研究はJSPS科研費JP20K00481の助成を受けたものである。ここに特記し感謝の意を表したい。

注

1）　拙稿「13世紀における古フランス語散文「聖杯物語群」の成立」（中央大学『人文研紀要』第73号，2012年，35～59頁）を参照。

2）　妖精モルガーヌについては，フィリップ・ヴァルテール（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）『アーサー王神話大事典』（原書房，2018年，377～381頁）を参照。

3）「武勲詩」については，神沢栄三「中世の叙事詩」（『フランス文学講座　第３巻　詩』大修館書店，1979年，３～29頁）を参照。

4）　邦訳は，神沢栄三訳『ロランの歌』（『フランス中世文学集１　信仰と愛と』白水社，1990年，所収）を参照。

5）『ローランの歌』については，佐藤輝夫『ローランの歌と平家物語　前編』（中央公論社，1973年），原野昇「『ロランの歌』」（原野昇編『フランス中世文

学を学ぶ人のために』世界思想社，2007年，21～35頁），およびフィリップ・ヴァルテール（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）『英雄の神話的諸相―ユーラシア神話試論Ⅰ』（中央大学出版部，2019年）第6章「ヨーロッパの3人の英雄の挑戦」を参照。

6）「武勲詩」についての先駆的な研究の中で佐藤輝夫は，こうした詩群形成の過程を見事な比喩を用いて次のように説明している。「十三世紀の中葉に於て存在したかやうな多くのジェストは，丁度食鹽水の中に差入れられた白金の棒の周圍に，結晶が絡まりつくのと同じやうに，それぞれ根幹ともなるべき當初の作品があつて，それを中心に，若くはそれを手本に，潤色，補筆，展開，凝集せられて，自づから其處に一大詩群が構成せられて行ったものだと言はれる。」（佐藤輝夫『仏蘭西中世「語りもの」文藝の研究』白水社，1941年，48～49頁）。

7）『ジラール・ド・ヴィエンヌ』（*Girart de Vienne*，1180年頃）の作者ベルトラン・ド・バール＝シュル＝オーブ（Bertrand de Bar-sur-Aube）は，「武勲詩」を3人の英雄，つまりシャルルマーニュ（フランス国王），ドーン・ド・マイヤンス（ガヌロンの家系），ガラン・ド・モングラーヌ（ギヨーム・ドランジュの祖先）を中心とした3つの詩群に分類した。それぞれ慣例で「国王の詩群」，「ドーンの詩群」，「ガランの詩群」（または「ギヨーム・ドランジュ詩群」）と呼ばれている。

8）「ギヨーム・ドランジュ詩群」については，小栗栖等「ギヨーム詩群その他」（前掲書・原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』，36～43頁）を参照。この詩群についての古典的な研究は，ジャン・フラピエの著作である（J. Frappier, *Les chansons de geste du cycle de Guillaume d'Orange*, Paris, Société d'édition d'enseignement supérieur, t. 1, 1955 ; t. 2, 1965）。ギヨーム・ドランジュの武勲を語った作品群の多くは，13世紀以降に成立した「系列写本」（manuscrit cyclique）の形で現在に伝わっている。「系列写本」ではギヨーム・ドランジュの武勲が年代順に語られ，その主軸をなしているのが『ギヨームの少年時代』（*Enfances Guillaume*），『ルイの戴冠』（*Couronnement de Louis*），『ニームの荷車隊』（*Charroi de Nîmes*），『オランジュの陥落』（*Prise d'Orange*），『アリスカン』（*Aliscans*），『ギヨームの出家』（*Moniage Guillaume*）である。「系列写本」にはギヨームの武勲だけでなく，『ヴィヴィアンの少年時代』（*Enfances Vivien*），『ヴィヴィアンの武勲』（*Chevalerie Vivien*），『ロキフェールの戦い』，『レヌアールの出家』など，ギヨームの親族の物語も取りこまれていった。ギヨームの活躍を描いた最古の作品と考えられる『ギヨームの歌』（*Chanson de Guillaume*，1140年頃）は，『アリスカン』とほぼ同じ

内容の作品だが，「系列写本」には収録されていない。なお『ギヨームの歌』の邦訳は，訳者代表　呉茂一・高津春繁『世界名詩集大成１　古代・中世篇』（平凡社，1963年）所収，佐藤輝夫訳を参照。

9）ギヨーム・ドランジュの歴史上のモデルとされてきたのは，フランク王国宮宰カール・マルテルの孫にあたるトゥールーズ伯ギヨームである。８世紀末に南フランスへ侵攻したサラセン勢力の一隊を迎え撃ち，９世紀初めにはカール大帝によるバルセロナ攻囲の一翼を担った人物である（前掲書・佐藤輝夫『ローランの歌と平家物語　前編』，10頁）。

10）*Aliscans*, Texte établi par C. Régnier, présentation et notes de J. Subrenat, traduction revue par A. et J. Subrenat, Honoré Champion, 2007. なおヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハが著した叙事詩『ヴィレハルム』は，古高ドイツ語による『アリスカン』の翻案作品である。『ヴィレハルム』の邦訳は，伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一・有川貫太郎・松浦順子訳を参照（第１・２巻―『名古屋大学教養部紀要』17輯，1973年，60～80頁；第３巻―同上18輯，1974年，105～140頁；第４巻―『名古屋大学教養部紀要Ｃ（外国語・外国文学）』19輯，1975年，68～89頁；第５巻―同上20輯，1976年，109～128頁；第６・７巻―『名古屋大学教養部・名古屋大学語学センター紀要Ｃ（外国語・外国文学）』21輯，1977年，103～140頁；第８巻―同上22輯，1978年，127～143頁；第９巻―同上23輯，1979年，167～191頁。有川は第３巻から，松浦は第５巻から）。『ヴィレハルム』については，小栗友一による３点の論考を参照（「『ヴィレハルム』における騎士像―『パルチヴァール』と対比しつつ」，『ドイツ文学における古典と現代―登張正實先生古稀記念論文集』第三書房，1987年，19～36頁；「『ローラントの歌』から『ヴィレハルム』へ―「寛容」の問題をめぐって」，日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第23号，1991年，17～30頁；「『ヴィレハルム』のアクチュアリティ」，同上第50号，2018年，77～79頁）。

11）レヌアールが戦いで使う「棍棒」に対応する古フランス語は「ティネル（tinel）」であり，桶などを運ぶために使う大きな棒を指した。ジュデオン・ユエが指摘するように，王宮の調理場で蔑まれた怠け者として暮らした後，怪力を活かし「棍棒」を武器に戦うレヌアールは，幼少年期をベッドや灰の中で無為に寝て過ごすシンデレラの男性版に対応するばかりか，鉄棒で武装し敵を倒す「熊のジャン」にも似ている（ジュデオン・ユエ，関敬吾監修・石川登志夫訳『民間説話論』同朋舎，1981年，171～172頁）。またフィリップ・ヴァルテールが詳細に検討したように，「棍棒」を手にしたレヌアールは，ガリアの神スケッルス，ガロ＝ローマ期の森の神シルヴァヌス，アイル

ランド神話のダグダに代表されるハンマーを手にした神の系列に属すると考えられる（Ph. Walter, « Rainouart et le marteau-tonneau : essai de mythologie épique et pantagruélique », *L'information littéraire*, 1, 1994, p. 3–14）。

12） ポルパイヤールの位置については，スペイン説とフランス説が出されてきた。モニカ・バーネットによると，「ギヨーム・ドランジュ詩群」のポルパイヤールは，フランスのモンペリエ南方にあるエロー県の村ラット（Lattes）である可能性が高いという（M. Barnett, " Porpaillart in the Cycle de Guillaume d'Orange ", *The Modern Language Review*, 51–4, 1956, pp. 507–511 ; 66–4, 1971, pp. 772–774）。

13） フランス中世文学研究のパイオニアの１人ポーラン・パリス（P. Paris）は，『フランス文学史』第22巻の中で『ロキフェールの戦い』の梗概を紹介している（*Histoire Littéraire de la France*, 22, 1852, p. 532–538）。これはおそらくフランス中世文学研究者による，この作品の最初期の紹介である。

14） 『ロキフェールの戦い』には散文版もあり，15世紀の２写本，つまりパリ・フランス国立図書館フランス語796番写本（旧7565番写本）と同図書館1497番写本により伝わっている。

15） 『ロキフェールの戦い』を伝える写本の略号は，M. Tyssens, *La geste de Guillaume d'Orange dans les manuscrits cycliques*, Paris, Les Belles Lettres, 1967による。この略号は，*Nouveau répertoire de mises en prose*（*XIVe–XVIe siècle*）, sous la direction de M. Colombo Timelli, B. Ferrari, A. Schoysman et F. Suard, Classiques Garnier, 2014, p. 460でも踏襲されている。写本の推定筆写年代は，*Aliscans*, Texte établi par C. Régnier, *op. cit.*, p. 9–11による。B１写本とB２写本については，N. Andrieux, « Un programme d'écriture et sa réalisation : les manuscrits B１ et B２ du Cycle de Guillaume », *Romania*, 104, 1983, p. 229–236,「ギヨーム・ドランジュ詩群」における語彙については，N. Andrieux–Reix, « Écriture d'un cycle, écriture de geste. L'exemplarité d'un corpus », *Romania*, 108, 1987, p. 145–164を参照。なおリスボン国立図書館には，『アリスカン』の最後の部分とともに『ロキフェールの戦い』の冒頭122行を伝える２葉の断片があり，マドレーヌ・ティッセンスとファンニ・ボグダノフがそれぞれ，異なる学術雑誌にテクストを紹介している（M. Tyssens, « Fragments d'un manuscrit de la Geste de Guillaume （BNL, MSS. 258.42）», *Cultura Neolatina*, 61, 2001, p. 25–53 ; F. Bogdanow, « Un nouveau manuscrit d'*Aliscans* et de la *Bataille Loquifer* », *Romania*, 119, 2001, p. 357–413）。この断片は13世紀末か14世紀初めのものとされる。

16） *La Bataille Loquifer I*. Édition critique d'après les mss. de l'Arsenal et de

Boulogne par J. Runeberg, Helsingfors, Imprimerie de la Société de littérature finnoise, 1913.

17） *La Bataille Loquifer*, by M. Barnett, Oxford, Blackwell, 1975. ちなみにマドレーヌ・ティッセンスは，Aグループの4写本（A^1，A^2，A^3，A^4）とBグループの2写本（B^1，B^2）だけを「ウルガタ」と呼んでいる（M. Tyssens, *op. cit.*, p. 39）。

18） ロキフェールが用いる梃子やレバーのような「棍棒」に相当する古フランス語「ロック（loque）」は，ヴァルトブルク『フランス語語源辞典』によると，中期ネーデルランド語 loke に由来する（W. von Wartburg, *Französisches Etymologisches Wörterbuch*, 16. Band, Basel, R. G. Zbinden & Co., 1959, 479b）。

19）「棍棒」は野人や巨人が用いる武具であり，「野生」の世界を具現する。この点で参考になるのは，征服王としてのアーサーの履歴の中で特に有名な，モン＝サン＝ミシェルの巨人との戦いである。ジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア列王史』によると，「棍棒」を手に向かってきたこの巨人を，アーサー王は名剣カリブルヌス（英語名エクスカリバー）を手に迎え撃っている（瀬谷幸男訳『ブリタニア王列王史』南雲堂フェニックス，2007年，288～292頁）。それぞれが戦いに用いた「棍棒」と「剣」は，「野生」と「文明」を象徴している。

20） このように戦争の勝敗を各陣営の代表者の一騎討ちに委ねる話は，「武勲詩」にも「アーサー王物語」にも認められる。「武勲詩」の「ギヨーム・ドランジュ詩群」に属する『ルイの戴冠』では，ローマを包囲していた異教徒との戦いを終わらせるため，ギヨームが巨人コルソルト（Corsolt）との一騎討ちを制している（その折にギヨームは巨人に鼻を切り落とされ，以後「短鼻のギヨーム」と呼ばれるようになった）。また中世フランス語による「最古のアーサー王物語」とされるヴァース（Wace）の『ブリュット物語』（*Roman de Brut*）には，アーサー王が当時ゴール（ガリア）と呼ばれていたフランスへ攻め入り，パリを1か月にわたって攻囲したとき，フロール（Frolle）という武将がアーサー王との一騎討ちを申し出て敗れるというエピソードが見つかる（松原秀一・天沢退二郎・原野昇編訳『フランス中世文学名作選』（白水社，2013年）所収，ヴァース（原野昇訳）『アーサー王の生涯』，120～123頁）。

21）『ロキフェールの戦い』の小人ピコレとオーベロンは兄弟の間柄となっている。しかしながら『ユオン・ド・ボルドー』（*Huon de Bordeaux*，1260年頃）に登場する小人オーベロンには兄弟がいない。マルグリット・ロッシが指摘するように，妖精モルガーヌの息子である『ユオン・ド・ボルドー』のオーベロン（モンミュール Monmur の王）にはケルトの伝承とキリスト教化の痕

跡が認められるのに対し，『ロキフェールの戦い』のオーベロン（モンニューブルの王）にはそうした要素が認められない（M. Rossi, « Sur Picolet et Auberon dans la *Bataille Loquifer* », *Mélanges de philologie et de littérature romane offerts à Jeanne Wathelet-Willem*, 1978, p. 569-591）。ちなみにベルン本『トリスタン狂恋』（*La Folie Tristan de Berne*）によると，狂人を演じるトリスタンはマルク王に名を尋ねられたときに，ピコレ（またはピクース Picous）という偽名を使っている（v. 160 et v. 193）。この名は「小さい」を指すイタリア語「ピッコロ（piccolo）」と関連づけることができる（前掲書・ヴァルテール『アーサー王神話大事典』，301頁）。

22） ジャン＝シャルル・ベルテによると，『アリスカン』『ロキフェールの戦い』『レヌアールの出家』の 3 作品が描くレヌアールの履歴は，ジョルジュ・デュメジルが提唱したインド＝ヨーロッパ語族の 3 機能を順にたどっている。王宮の調理場で働く『アリスカン』のレヌアールは「第 3 機能」（豊穣性），戦士として活躍する『ロキフェールの戦い』のレヌアールは「第 2 機能」（戦闘性），僧侶となる『レヌアールの出家』のレヌアールは「第 1 機能」（神聖性）を表しているという。なお，この 3 作品をこの順番で収録する写本は 7 点現存している（J.-Ch. Berthet, « Rainouart et les bachelers dans *La Chanson de Guillaume* et les *Aliscans* », dans : K. Watanabe（dir.）, *Tous les hommes virent le même soleil*, Hommage à Philippe Walter, Tokyo, CEMT Éditions, 2002, p. 6-18）。

23） J. Whatelet-Willem, « La fée Morgain dans la chanson de geste », *Cahiers de civilisation médiévale*, 13, 1970, p. 209-219（ici, p. 218）; L. Harf-Lancner, *Les fées au Moyen Âge. Morgane et Mélusine. La naissance des fées*, Paris, Honoré Champion, 1984, p. 275.

24） M. Tyssens, *op. cit.*, p. 265-278.

25） R. Trachsler, *Disjointures – Conjointures. Étude sur l'interférence des matières narratives dans la littérature française du Moyen Âge*, Tübingen-Basel, A. Francke Verlag, 2000, p. 176-177.

26） 『ロキフェールの戦い』の最初の2750行のみを伝える A^2 写本には，「ここにロキフェールとアヴァロンとレヌアールの戦いが始まる」（'ci comance la bataille de Loquifer / d'Avalon et de Renoart'）という詩行があることから，欠落部分に妖精モルガーヌのエピソードが含まれていた可能性もある。

27） ジャンドゥー・ド・ブリーはこの物語を誰にも教えようとせず，息子に伝えた。ところがジャンドゥーの死後，ギヨーム伯（'Li cuens Guillelmes', v. 3047）が物語を筆写させてしまう。そのためジャンドゥーの息子は悲しみのあまり亡くなってしまったという。ちなみに E 写本では，作者の名はグラン

ドール・ド・ブリー（Graindor de Brie）となっている。

28） バーネットの校訂本によると，古フランス語ではモルグ（Morgue, v. 3703, v. 3847, v. 3920, v. 3949, v. 4158 ; Morguë, v. 3931）であり，モルガン（Morgain, v. 3908）が１か所だけに出てくる。

29） ボン大学図書館526番写本を底本にした『聖杯の書』が収録する『ランスロ本伝』は４分割されており，ランスロが「荷車の城」へ運ばれる場面は「ランスロの探索第２部」に見つかる（*Le Livre du Graal*, t. III, publiée sous la direction de Ph. Walter, Gallimard, 2009, p. 198-206）。プレイヤッド版『聖杯の書』については，フィリップ・ヴァルテール（渡邉浩司訳）「『聖杯の書』または13世紀散文「聖杯物語群」の誕生―ボン大学図書館526番写本をめぐって」（中央大学『仏語仏文学研究』第44号，2012年，211～234頁）を参照。

30） *Le Livre du Graal*, t. III, *op. cit.*, p. 198. この３人の女性については，アンヌ・ベルトゥロの論考（A. Berthelot, « Dame d'Avalon ? Les enchanteresses arthuriennes et l'Autre Monde », in : F. Vigneron et K. Watanabe (dir.), *Voix des mythes, science des civilisations. Hommage à Philippe Walter*, Peter Lang, 2012, p. 99-109, ici, p. 106-107）および，ピーター・ノーブルの論考（P. S. Noble, "Women in the Vulgate Cycle : From Saints to Sorceresses", *Reading Medieval Studies*, 30, 2004, pp. 57-74, especially, pp. 58-59）を参照。ロランス・アルフ＝ランクネールは，妖精が超自然的な力を備える人間女性となった13世紀の例として，この３人をあげている（L. Harf-Lancner, *Le monde des fées dans l'Occident médiéval*, Hachette Littératures, 2003, p. 210-211）。

31） 拙稿「『フロリヤンとフロレット』における妖精モルガーヌ」（中央大学『仏語仏文学研究』第53号，2021年，33～64頁）および拙稿「《伝記物語》の変容（その４）―『フロリヤンとフロレット』をめぐって」（中央大学『人文研紀要』第99号，2021年，399～432頁）を参照。モルガーヌを含む３人の妖精が赤子フロリヤンを連れ去る場面は，『ランスロ本伝』の冒頭で「湖の貴婦人」が幼子ランスロを誘拐する場面をなぞったものである。『ランスロ本伝』の冒頭については，拙稿「新旧の主君へ尽くすべき忠節―『ランスロ本伝』の描く騎士ファリアン像」（『英雄詩とは何か』中央大学出版部，2011年，209～236頁）を参照。

32） フィリップ・ヴァルテール（渡邉浩司・渡邉裕美子訳）「ガロ＝ローマ期の２つの３母神像」（『流域』第86号，2020年，46～50頁）を参照。

33） 第3694行の後半（'et grant topace lee'）は前行の後半と同じであるが，モニカ・バーネットが指摘する通り，写字生による重複誤写（dittography）である（バーネットによる校訂本 p. 8）。

34）　ジェフリー・オヴ・モンマス（瀬谷幸男訳）『マーリンの生涯』南雲堂フェニックス，2009年，48～49頁。

35）　クレティアン・ド・トロワの作品群は，ダニエル・ポワリヨンが編集を担当したプレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』（D. Poirion, (dir.), *Chrétien de Troyes, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1994）を参照。

36）　前掲書『クレティアン・ド・トロワ全集』によると，「モルガーヌの膏薬（‘antret’, ‘oignemant’）」への言及は，『エレックとエニッド』では第4219行以下，『イヴァン』では第2954行以下に見られる。

37）　J. Whatelet-Willem, art. cit., p. 217, note 41.

38）　拙稿「ゴーヴァンの異界への旅―クレティアン・ド・トロワ作『聖杯の物語』後半再読」，『アーサー王物語研究　源流から現代まで』中央大学出版部，2016年，145～194頁（特に158～163頁）を参照。

39）『ロキフェールの戦い』が描くアヴァロンでは，シャパリュがレヌアールとの一騎討ちにより人間の姿を取り戻している。このことは，ネリー・アンドリューが指摘するように，アーサー王世界とは無縁のレヌアールが，アヴァロンにかけられていた魔法を解除したと解釈できるのかもしれない（N. Andrieux, « Arthur et Charlemagne réunis en Avalon : la *Bataille Loquifer* ou l'accomplissement d'une parole », *Essor et fortune de la chanson de geste dans l'Europe et l'Orient latin. Actes du IXe Congrès international de la Société Rencesvals. Padoue-Venise, 29 août-4 septembre 1982*, Modena, Mucchi, 1984, t. II, p. 425-434（ici, p. 431））。

40）　中世フランス語による「アーサー王物語」では，『名無しの美丈夫』（*Le Bel Inconnu*）のガングラン，『フロリヤンとフロレット』のフロリヤン，『ボードゥー』（*Beaudoux*）のボードゥーなどの例が示しているように，会ったことのない主人公の武勇を聞いたアーサー王は，主人公との対面を心待ちにする。これに対して『ロキフェールの戦い』のアーサー王は，レヌアールのこれまでの武勇を伝え聞いていたにもかかわらず，シャパリュと対決させている。これはアーサー王が「武勲詩」という文脈の中に置かれているため，伝聞に頼ることなく自らの眼でレヌアールの力量を見定める必要があったからなのかもしれない（G. Toniutti, *Les derniers vers du roman arthurien. Trajectoire d'un genre, anachronisme d'une forme*, Genève, Droz, 2021, p. 190-195）。

41）　グランガレについては，前掲・拙稿「ゴーヴァンの異界への旅」，151～154頁を参照。

42）　拙稿「アーサー王によるローザンヌ湖の怪猫退治とその神話的背景（『アー

サー王の最初の武勲』787～794節)」(中央大学『仏語仏文学研究』第46号，2014年，1～35頁)を参照。

43) ホメロスの『オデュッセイア』以来，人魚は船乗りたちを魅了する歌で知られている。ここでは人魚たちが泉のほとりで('au chief d'une fontaine', v. 3966)歌っていることから，作者は泉で水浴を行う妖精の伝承を念頭に置いていた可能性がある。

44) コルボンが「本物の悪魔」とされることについてミリヤム・ホワイト＝ルゴフは，両親の性質によるだけではなく，彼がいわば「叙事詩」と「物語(ロマン)」という異なる2つのジャンルの融合から生まれたからではないかと指摘している (M. White-Le Goff, « Morgane ou le paradis maternel : lait, littérature et féerie », in : A. Caiozzo et N. Ernoult (dir.), *Femmes médiatrices et ambivalentes. Mythes et imaginaires*, Armand Colin, 2012, p. 351-362 (ici, p. 353))。

45) この点で想起されるのは，フランス西部ポワトゥー地方のリュジニャン一族の始祖妖精メリュジーヌの子供である。彼女は騎士レイモンダンとの間に10人の子供をもうけたが，8番目の子供オリブルは性格が悪く，悪事をすることしか考えていなかった。怪物的な子供たちについては，フィリップ・ヴァルテール(渡邉浩司・渡邉裕美子訳)『ユーラシアの女性神話―ユーラシア神話試論Ⅱ』(中央大学出版部，2021年)の第6章「スキタイのメリュジーヌ」を参照。

46)「ギヨーム・ドランジュ詩群」に属する他の物語群では，ティボーはデラメ王の息子ではなく甥，ティボーの先妻オラブル(Orable)はデラメ王の娘だとされている(オラブルは後にギヨームの妻となり，洗礼を受けてギブールと名乗るようになる)。また『ギヨームの歌』によると，ギヨームはデラメ王を一騎討ちで倒すが，とどめを刺したのはヴィヴィアン(Vivien)の兄弟ギー(Gui)とされる。さらに，ティボー自身がオランジュの城壁の下でヴィヴィアンによって討ち取られているため，『ロキフェールの戦い』以前に亡くなっているはずである。こうした系譜上の混乱や，前に亡くなったはずの人物が再登場するケースは，詩群の中で頻繁に見られる現象である。

47) マルグリット・ロッシによると，モンニューブル(Montnuble)は「雲のかかった山」あるいは「暗い山」を指し，「武勲詩」に頻出する暗い国々や，光を恐れるゲルマン起源の小人の伝承を想起させるという(M. Rossi, article cité, p. 588, note 62)。

48)『ロキフェールの戦い』のオーベロンはピコレの兄弟であるが，『ユオン・ド・ボルドー』のオーベロンはジュール・セザールと妖精モルガーヌの息子

とされる。モルガーヌとアーサーが同じ母から生まれているとすると，オーベロンはアーサーの甥となり，レヌアールがモルガーヌとの間にもうけたコルボンとは異父兄弟の間柄となる。カルロス・クラモテ＝カレトが指摘するように，オーベロンが治めていたモンニューブルは明らかに異界であり，小人ピコレがレヌアールの息子マイユフェールをこの国へ運ぶ件が「アヴァロン・エピソード」の中ほどに置かれているのは偶然ではない。レヌアールをアヴァロンへ運んだモルガーヌと同じく，ピコレも「武勲詩」を「アーサー王物語」と接続させるための媒介として機能しているのである（C. F. Clamote Carreto, « Rainouart au pays des fées. Interchangeabilité des personnages et dialogisme dans *La Bataille Loquifer* », *Façonner son personnage au Moyen Âge*, éd. Ch. Connochie-Bourgne, Aix-en-Provence, Publications de l'Université de Provence, 2007, p. 99-122）。

49） 筋書きの上で『ロキフェールの戦い』に続くのが『レヌアールの出家』であり，そこではレヌアールがブリウードの聖ジュリヤン修道院で修道士となる。そのため，『ロキフェールの戦い』の最後に見られる聖ジュリヤンへの呼びかけと修道士になる決意は，『レヌアールの出家』を予告するものとなっている。

50） アヴァロンの住人であるシャパリュがモルガーヌの陰謀に加担し，レヌアールを溺死させようとしたのとは対照的に，レヌアールから恩返しを条件に海へ帰してもらった人魚は，溺死寸前だったレヌアールを救い出す。この人魚は仲間の力を借りて，眠るレヌアールを領国の海辺に運んでいるが，それと対照的なのはモルガーヌを含む３人の妖精が同じ海辺で眠っていたレヌアールをアヴァロンへと運ぶ件である。また巨人に注目してみると，サラセン軍を代表してレヌアールと戦ったロキフェールはおぞましい姿の巨人だったが，レヌアールとの一騎討ちで双方が深手を負うと，魔法の膏薬をレヌアールにも与えるといった，敵ながらも騎士道精神にかなった振舞いを見せている（S. Strum-Maddox and D. Maddox, "Renoart in Avalon : Generic Shift in the *Bataille Loquifer*", *Shifts and Transpositions in Medieval Narrative. A Festschrift for Dr Elspeth Kennedy*, edited by K. Pratt, D. S. Brewer, 1994, pp. 11-22, especially, pp. 20-21）。

51） こうした叙事詩の変遷については，ピエール＝イヴ・バデル（原野昇訳）『フランス中世の文学生活』白水社，1993年，183～184頁を参照。

52） F. Suard, « La *Bataille Loquifer* et la pratique de l'intertextualité au début du XIIIe siècle », *VIII Congreso de la Société Rencesvals. Pamplona-Santiago de Compostela 15 a 25 de agosto de 1978*, Pamplona, Institución Principe de Viana,

1981, p. 497–503（ici, p. 502）.『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」に見られる主人公の異界滞在，怪物との戦い，妖精モルガーヌとの情事および息子の誕生といった諸要素は，デンマーク公の息子オジエ（オジエ・ル・ダノワ）が主人公の物語群にも見つかる。リエージュの著作家ジャン・ドゥートゥルムーズ（Jean d'Outremeuse）の『歴史の鑑』（*Ly Myreur des Histors*）（1395年）に見られるオジエの冒険譚と，『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」の類似について，モニカ・バーネットはスタヴロとコルヴァイという２つの修道院の院長だったヴィーバルト（Wibald，1098～1158年）のような存在がこうした類似を説明してくれるのではないかと推測している。『ロキフェールの戦い』がシチリアで創作されたと仮定した場合，その内容がリエージュ（現ベルギー東部）まで伝わるには，神聖ローマ帝国の皇帝補佐官・外交官としてイタリア方面に何度も出向いたヴィーバルトのような人物の介在が必要なのだという（M. Barnett, “ Renoart au tinel and Ogier de Danemarche : A Case of Contamination ”, *Medium Ævum*, Vol. 40, No. 1, 1971, pp. 1–5）。なおヴィーバルトについては，岩波敦子「12世紀の外交官・修道院長ヴィーバルトの生涯」（宮崎揚弘編『続・ヨーロッパ世界と旅』法政大学出版局，2001年，108～142頁）を参照。

53） J. Wathelet-Willem, « La *Bataille Loquifer* dans la version D : une ‘mervaillose chanson’ », *Studies in Medieval French Language and Literature presented to Brian Woledge in honour of his 80th birthday*, Edited by Sally Burch North, Genève, Droz, 1988, pp. 235–252（ici, p. 251）.

54） エマニュエル・ボームガルトネルはバーネット版『ロキフェールの戦い』についての書評の中で，「この作品はおそらく不器用な試みであるが，叙事詩から英雄の冒険物語への変遷や変貌を記している限りにおいて，注目に値する」と評している（Review by E. Baumgartner, *Romance Philology*, 31–2, 1977, p. 455–457）。「武勲詩」と「アーサー王物語」など，中世フランス文学におけるさまざまなジャンルの干渉・競合・融合については，リシャール・トラクスラーの浩瀚な著作を参照（R. Trachsler, *Disjointures – Conjointures, op. cit.*）。

55） 『ロキフェールの戦い』で誕生が予告されたコルボンは，『レニエの幼少年期』に異教徒アグリパール人（Agripart）の王として登場し，モリモン（Morimont）という町でマイユフェールの息子レニエと戦う。レニエは，馬，ロバ，熊へ順に変身し悪臭を放つコルボンに手を焼くが，呪文を唱えてコルボンの変身を解除し，殺害する（*Les Enfances Renier, chanson de geste du XIIIe siècle*, éditée par D. Dalens-Marekovic, Paris, Honoré Champion, 2009, v. 8426–8540）。このエピソードに先立ち，ロキフェルヌでマイユフェールが異教徒の

ビュトール（Butor）王と戦っていたとき，コルボンはビュトールに加勢した。そしてマイユフェールとビュトールの一騎討ちの途中で，自分がモルガーヌとレヌアールの息子であることを明かし，ロキフェルヌの支配権を要求する（v. 5525–5533）。